

目次

ごあいさつ	1
日程表	2
参加のみなさまへ（諸連絡）	2
発起人・設立準備委員・研究会実行委員一覧	3

Part 1

パネルディスカッション「スポーツのジェンダー研究を展望する テーマ設定について	4
パネリスト発表要旨とプロフィール	
ジェンダーと教育研究の方法論をめぐって	5
セクシュアル・ハラスメント問題が求める実践と研究の協同	8
ソルトレーク五輪を通してみるジェンダー研究の拡がり	10

Part 2

各ラウンドテーブルの趣旨と内容	
学校体育とジェンダー：ジェンダー・フリー実現に向けて	13
スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント問題への対応	14
メディア・スポーツとジェンダーをめぐる問題について	15
入会のご案内	16
ホームページのご案内	16

ごあいさつ

新しい世紀を迎え、男女が性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現が、緊要の課題となっています。国内では、1999年に男女共同参画社会基本法が公布・施行され、国際的には、女性差別撤廃条約、北京行動綱領、さらには世界女性スポーツ会議における成果文書であるブライトン宣言等が採択され、効力を発揮しつつあります。

しかし、それらの条約や法制度の整備に比べてスポーツにおける男女平等・公平を推進する運動、それを牽引する理論構築が十分ではないように思われます。わが国におけるスポーツのジェンダー研究を概観すると、体力や競技記録を性別に分析したカテゴリー的研究、メディアコーチ・管理職、競技種目や参加に関する配分的研究が多くを占めています。スポーツのジェンダー・ポリティクスを解明するには、スポーツがどのようにしてジェンダーの支配構造を支え、ジェンダーの再生産装置としての役割を担ってきたか等、関係論的研究が必要ですが、これらの研究はまだ緒に付いたばかりです。

本研究会はこのような状況に鑑み、「スポーツにおける男女平等・公平の達成」「ジェンダーフリーなスポーツ文化の構築」を目標に、定期的な研究会の開催、研究誌の発刊、HP公開などの活動を行っていくことを趣旨としています。

このたび、全国から研究者、教育関係者、行政担当者、スポーツ指導者、競技者、ジャーナリスト、スポーツ愛好家やスポーツを専攻する学生、ジェンダーの問題に関心をもつさまざまな社会的立場にあるみなさまにご参加いただき、設立記念第一回研究会が開催できましたことを心よりお礼申し上げます。本研究会では、ジェンダー研究において気鋭のパネリスト3名をお迎えして、「スポーツのジェンダー研究を展望する」をテーマに、研究手法や実践と研究との関係、ジェンダー研究の発展などについて議論を深めつつ、スポーツのジェンダー研究の世界を概観することをねらいとしました。このような大きく深いテーマに向き合うには、時間設定など十分とは申せませんが、参加のみなさまと共にスポーツのジェンダー研究の入口に立つことを最優先と致しました。

本年はじめより、研究会の発足に向けて実行委員、並びに設立準備委員とともに準備をしてまいりました。発起人のみなさまには、多方面から貴重なご助言をいただきました。今後、ここに集いましたみなさまと共に、スポーツとジェンダー研究の交流を拡げ、質の高い研究を発信できる場となりますよう努力を重ねていく所存です。ご協力とともに率直なご意見を賜りますようお願い申し上げます。

日本スポーツとジェンダー研究会設立準備委員会代表 飯田貴子
設立記念第一回研究会実行委員長 井谷恵子

日程表

11:00	12:00	13:00	15:15	15:30	16:30	17:30	20:00
設立総会 1Fパフォーマンススペース	開会と挨拶	Part 1 パネルディスカッション 「スポーツのジェンダー研究を展望する」 1Fパフォーマンススペース	休憩と移動	Part 2 ラウンドテーブル 4F中会議室	懇親会 東天紅OMM店		

ラウンドテーブル会場

- 「ジェンダーと教育研究の方法論をめぐって」4F中会議室 1
- 「セクシュアル・ハラスメント問題が求める実践と研究の協同」4F中会議室 2
- 「ソルトレーク五輪を通してみるジェンダー研究の拡がり」4F中会議室 3

参加のみなさまへ（諸連絡）

- ・ 研究会へのご入会について、p.17 にご案内しています。研究会の合間を見て入会手続きをさせていただきますようお願い申し上げます。
- ・ 本研究会はホームページで情報の発信や研究交流、入会手続きを行っています。P.17 をご参照下さい。
- ・ パフォーマンススペース内に、スポーツとジェンダーに関わる情報コーナーを設置しています。ご利用下さい。
- ・ ドーンセンターには、情報ライブラリー（2F 9:30-21:30）、女性学関係の出版物を扱う書店（1F 10:00-17:00）があります。ご利用下さい。
- ・ ネームタグは研究会中ご表示いただき、終了後、受付テーブルまでご返却下さい。
- ・ アンケートには率直なご意見をご記入いただき、終了後受付の回収箱にお入れ下さい。
- ・ 昼食は、1階レストラン、京阪・地下鉄天満橋駅周辺のレストランをご利用下さい。
- ・ 懇親会は、17:30 からドーンセンター近くの東天紅 OMM 店で予定しています。申し込まれた方は17:15 にドーンセンター1階正面出入り口にお集まり下さい。なお、参加を申し込まれた方のキャンセルは致しかねますのでご了承下さい。

日本スポーツとジェンダー研究会発起人

阿江美恵子，赤坂美月，阿部 潔，荒井啓子，荒井貞光，飯田貴子，池田恵子，井谷恵子，出原泰明，伊藤公雄，梅津迪子，江刺正吾，海老原修，大須賀純，太田あや子，大束貢生，岡尾恵市，掛水通子，片岡康子，金井秀子，北田和美，木村吉次，木村真知子，木村涼子，工藤保子，熊安貴美江，近藤良享，佐伯年誌雄，佐藤直子，佐藤光子，佐野信子，清水重勇，高橋健夫，高峰修，田中良子，谷岡郁子，田原淳子，團琢磨，手塚美粧，中瀬古哲，中房敏朗，丹羽劭昭，萩原美代子，林信恵，平川澄子，深江誠子，朴木佳緒留，前田博子，松田恵示，松本迪子，水野加余子，三井悦子，三ツ谷洋子，三輪順子，牟田和恵，森敏生，森川貞夫，山田ゆかり，吉川康夫，吉中康子，來田享子

日本スポーツとジェンダー研究会設立準備委員会

飯田貴子，井谷恵子，北田和美，熊安貴美江，田原淳子，吉中康子，來田享子

設立記念第一回研究会実行委員会

委員長	井谷恵子
副委員長	梅津迪子 來田享子
総務	井谷恵子，飯田貴子，熊安貴美江，近藤良享，手塚美粧，吉川康夫
研究	梅津迪子，阿江美恵子，飯田貴子，井谷恵子，大束貢生，木村真知子，北田和美，熊安貴美江，佐野信子，平川澄子，松田恵示，
会場	來田享子，高峰修，学生スタッフ
受付	工藤保子，太田あや子，萩原美代子，三井悦子
広報	吉中康子，荒井啓子
ホームページ	來田享子，高峰修
財務	熊安貴美江，三輪順子
記録	北田和美，平川澄子
渉外	佐藤光子，北田和美，田原淳子
接遇	赤坂美月，学生スタッフ
事務局	熊安貴美江，手塚美粧

Part 1 パネルディスカッション「スポーツのジェンダー研究を展望する」

テーマ設定について

コーディネーター：木村 真知子（奈良教育大学）

男女が性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる社会の実現をめざして、国内では男女共同参画社会基本法の公布・施行(1999)、国際的には女性差別撤廃条約北京行動綱領、そして第1回世界女性スポーツ会議における「ブライトン宣言」の採択(1994)など、さまざまな条約や法令が整備されるようになってきた。

このような条約や法令は社会変革に不可欠のものであるが、これらを実効性のあるものにするには、飽くなく草の根運動とそれを牽引する理念に支えられる必要がある。逆にいえば、こういった条約・法令といったフォーマルなものも、もともとはインフォーマルな日常生活のなかで誰かが何らかの矛盾や問題にぶつかって「これはおかしい」と訴え、周りの人々も「なるほどこれはおかしい」と共感し、そのような「思い」が積み重ねられて、生み出されてきたものであろう。このように考えると、男女平等・公平を促進するこれらの条約・法令を生み出してきた「思い」を大切にし、日常生活のなかで「これはおかしい」といえる感性と知性を磨くことがとりわけジェンダー研究には求められるのではないだろうか。なかでもスポーツの世界ではこれまで「常識」とされ疑問を抱く余地すら与えられてこなかった事象に「おかしさ」が潜んでいる可能性は大いにありそうである。そういった「おかしさ」にジェンダーの視角からメスを入れ、よりよいスポーツ文化の構築に向けて力が発揮できるような、そういう研究をわれわれはおこなっていききたいものである。

そこで本パネルディスカッションでは、われわれの前途に大いなるヒントを与えてくれる三人のパネリスト、木村涼子さん、牟田和恵さん、阿部潔さんに発表をお願いした。木村さんには、ジェンダーの観点から教育を社会学的に研究する場合の方法論をご紹介いただくことでスポーツのジェンダー研究にさまざまな示唆を与えていただきたい。またご自身の研究課題からより具体的な問題を取りあげて、ジェンダー研究の醍醐味について大いに語っていただきたいと思う。牟田さんには、学校・大学からスポーツ界に至るセクシュアル・ハラスメント問題の根っこに迫っていただくとともにジェンダー研究の実践的価値について論じていただきたい。阿部さんには、メディア表象におけるジェンダー問題をソルトレーク五輪を事例に徹底解剖することによって、メディアに埋め込まれているポリティクス（権力関係）を解読していただきたい。三人のパネリストのご研究は、それぞれテーマもアプローチの仕方も異なるが、共通していえることは日々社会生活を営むわれわれ自身がほとんど無自覚のうちに取り込まれてしまっている権力構造というものをジェンダー研究を通して浮き彫りにしようとしている点ではないかと思われる。

スポーツがジェンダーの再生産装置としていかに機能し、権力構造の維持・発展にいかん荷担してきたのか。それがスポーツにおける女性ひとりひとりにとって、そして男性ひとりひとりにとっての「生きにくさ」とどのようにつながっているのか。その「生きにくさ」の正体をどのようにしたら可視化することができ、変革へとつなげていくことができるのか等々、スポーツのジェンダー研究には課題が山積しているといっても過言ではないだろう。本パネルディスカッションを通して、スポーツのジェンダー研究の意味を確認するとともに、その方法論について理解を深め、これからのわれわれの研究活動の展望を開きたいと願っている。

ジェンダーと教育研究の方法論をめぐって

木村涼子 (大阪女子大学人文社会学部)

1) 「女性と教育」研究から「ジェンダーと教育」研究へ

従来の学問は男性中心であるという批判が、フェミニズム(女性解放運動)の隆盛を背景に高まったのは七〇年代のことである。研究をする主体として男性が圧倒的多数であるだけでなく、研究の対象としても男性がとりあげられることが多いという批判である。たとえばこれまでの社会科学は、暗黙のうちに男性イコール人間ととらえ、男性を分析対象とすることで人間社会を解釈し得ると前提してきたのではないか。その結果、人間の半数を占める女性を無視ないしは軽視してきたのではないか。イギリスの社会学者サンドラ・アッカーは、社会学におけるそうした状況を批判して、「女性のいない世界」"No-Woman's -Land" (Sandra Acker, Gendered Education, Open University Press, 1994) と呼んだ。

研究主体としても研究対象としても、もっと女性が主役になっていくべきだ。そうした気運の下で、ジェンダーと教育に関する社会学研究も大きく展開する。まずは、これまで軽視されてきた女性に焦点に当てることが目指されたため、当初の研究は「女性と教育」研究と名づけることがふさわしいものが多かった。教育における女子・女性の問題に注目する研究が蓄積されることによって、やがて女性だけでなく、女性と対になる男性も同時に取り上げ、<女>および<男>に向けての社会化(socialization)に関心を向ける動きが生まれてくる。それは、<女>と<男>という差異化を生み出す文化を探求する、すなわち「ジェンダーと教育」研究として発展してきたのである。

2) 就学経路上の性差を認識する ・既存の統計を読み解く・

ジェンダーの観点から教育をみるという時、まずはそこに生じている性差を明らかにすることが最初の課題となる。単なる印象や感覚ではなく、実証的に明らかにすることが必要だ。

進学率、進学先、専攻分野、教員構成など、教育現象の様々な側面について統計的に男女を比較することによって、見えてくる問題は多い。

3) 性差に関わる要因をさぐる ・質問紙調査・インタビュー調査・

さらに問題を深めるために社会学的研究は、独自の質問紙調査やインタビュー調査によってオリジナルなデータを収集する。問題意識に即した調査を計画・実施することによって、既存の統計調査だけでは明らかにできない点を追求し得る。

統計で見えてきた就学系路上の性差に関わる要因をさぐりだすために、さまざまな調査がおこなわれている。代表的なものをいくつか紹介しよう。

まずは、質問紙調査などによって進学意識や進学動機をさぐり、進学に関わる子どもたちの意識の性差を明らか

にしようとするものが挙げられる。また、子どもたちが抱く種々の生活意識や価値観を総合的に分析して、学校における生徒文化を明らかにする研究があるが、その場合も男子の生徒文化と女子の生徒文化の間には多くの差異がみだされている。生徒文化の男女差は勉学や進路に対する態度の性別分化と関連があることが示唆されている。さらに、女子の進路選択および将来展望にかかわる価値観として、性役割意識と職業アスピレーションについて調査した研究も多い。

それらの研究の蓄積によって、女子の進路選択のプロセスには、固定的な性役割意識をはじめとするジェンダー要因が進路選択の幅を制限し、達成意欲を抑圧するメカニズムがはたらいていることが明らかにされつつある。

4) 性差を生み出す学校内プロセスへの注目 ・エスノグラフィックな手法・

性差がいかにして生まれるのかを明らかにするために、提唱されたのが解釈論的アプローチや相互作用理論にもとづくエスノグラフィックな学校研究である。学校の内部を詳細に観察・分析することによって、男女の進路分化や性別の社会化を生み出す学校内のプロセスを明らかにしていく。

そうした学校内部に入り込んでのエスノグラフィックな研究の中で、注目されてきたのが「かくれたカリキュラム」という概念である。学校には公的なカリキュラム以外に、暗黙のうちに共有されたある種の「かくれたカリキュラム」が存在する。学校教育の「かくれたカリキュラム」には、性別に関するメッセージもふくまれている。教師のなにげない言動の中に、また、あたりまえとされてきた学校運営の慣習の中に、「女の子はこうあるべき」「男の子はこうあるべき」という固定的な男女観が表現され、知らず知らずのうちに子どもたちはそれを学んでいる。

教師と生徒の相互作用（言葉やしぐさのやりとり）を観察した研究では、授業の中で教師は女子生徒よりも男子生徒に多く働きかける傾向があることが指摘されている。さらには、生徒の側の授業時間における発言や活動も、女子よりも男子の方が活発であるという現象がみだされている。すなわち、授業空間においては男子の方が教授の対象／学習主体として優先的な位置にあるということである。

5) 現在を問いなおす史的探求 ・歴史社会学的手法・

「かくれたカリキュラム」のような、学校教育におけるジェンダー秩序は、どのようにして生まれ発展してきたのか。それを歴史的な視野によって探求しようとする研究の流れもある。

ジェンダーにかかわっての史的探求は、学校がもつめる／形成する〈女〉〈男〉および両者の関係性がいかなるものであったのかをたどろうとする。戦前の女子教育を特徴づける良妻賢母主義に焦点を当てた研究、女子高等教育の成立と拡大、婚姻市場における女性学歴の意味などをジェンダーの観点から見直す研究、学歴主義や立身出世主義の成立・浸透過程を明らかにする研究、学生文化や学生に対する社会的視線を明らかにしようとした研究など、とりわけ近年の歴史社会学的な教育研究の中に、ジェンダー秩序形成の理解に寄与するものが多くみられる。

6) スポーツとジェンダーの教育研究

スポーツとジェンダーに関する教育社会学的研究はまだ未開拓の分野が多い。ジェンダーと教育研究の方法論について、おおまかにわけて4つのものを概観したが、どの手法においても、スポーツとジェンダーをテーマとした研究が今後展開されていくべきだろう。さまざまな可能性が開かれている。課題は山積みであるといってもよいだろう。

参考文献

- 橋本紀子『男女共学制の史的研究』大月書店，1992年
深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房，1966年
小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房，1991年
牟田和恵『戦略としての家族』新曜社，1996年
山村賢明『日本人と母』東洋館出版社，1971年
竹内洋『立身出世主義・近代日本のロマンと欲望』NHK出版，1997年
赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房，1999年
筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学・心性と構造』木鐸社，1990年
天野正子『女子高等教育の座標』垣内出版，1986年
マリー・デュリュ＝ベラ，中野知津訳『娘の学校・性差の社会的再生産』藤原書店，1993年

パネリストのプロフィール

木村涼子（きむらりょうこ）

大阪女子大学人文社会学部 助教授

< 専門 > 教育社会学（ジェンダーと教育）

< 最近の研究テーマ / 活動 >

研究テーマは教育とジェンダー。教育は学校からマスメディアまで広義で考えています。現代社会と戦前の歴史的状況と両方に関心があるのですが、ここ数年は今の学校教育の中の性差別を見なおすことに力を入れてきました。学校が生み出す性差別をなくし、男女平等教育をつくっていく方向を、学校現場と関わりながら考えています。

< 主な著書 >

単著書『学校文化とジェンダー』勁草書房（1999）

共著書『教育の社会学』有斐閣（2000）

共著書『社会の流動化と社会格差』ミネルヴァ書房（2002）

共著『近代日本文化論8 女の文化』岩波書店 2000

セクシュアル・ハラスメント問題が求める実践と研究の協同

牟田和恵（甲南女子大学人間科学部）

80年代末から日本でもセクシュアル・ハラスメント問題が社会的に浮上したが、大学・小中高校でも問題化するのにもその後時間はかからなかった。99年の雇用機会均等法改正により、事業主のセクシュアル・ハラスメント防止配慮義務が定められたのと同時に、文部（科学）省や各教育委員会は大学・学校でのセクシュアル・ハラスメント防止に乗りだし、学校現場でセクシュアル・ハラスメント対策が始まったが、その実効性及び徹底度においては残念ながらまだまだ疑問があり、対策はスタートラインに着いたところだ。

大学や学校というところが、学問研究と教育・指導の場、「聖域」であり、教員と学生・生徒の間には上司と部下にはない信頼関係や学問上の尊敬があって、職場のようなセクシュアル・ハラスメントはないと考えるならば、その幻想は学校でのセクシュアル・ハラスメントの現実を知れば、ただちに破れる。新聞等の報道、文部科学省や各大学の調査等で明らかになっているように、大学・学校は職場以上にセクシュアル・ハラスメントの横行する場だ。「聖域」どころか、セクシュアル・ハラスメント問題が可視化される過程で見えてきたのは、それとはまったく逆の、大学・学校というところだからこそセクシュアル・ハラスメントが起こりやすい構造があるということだ。

セクシュアル・ハラスメントでは、「対価型」「環境型」という区分がよく使われるが、実際には日本の職場では、組織・人事の特徴から、「対価型」は起こりにくい。上司が部下のクビや昇進をあからさまに左右するような権力をもちにくく、オフィスが密室になりにくいからだ。ところが、大学・学校では、教師は「対価型」を可能にする力もちやすい。成績・単位や卒業・修了の認定、指導のありようなど、教師は学生生徒に対し直接的な権力を持ち、下された評価には、第三者のチェックが入りにくい。しかも、教員に対して学生生徒が尊敬や信頼の念を抱きがちなのが権力の上下関係に拍車をかける。尊敬される教員であることそのものが問題であるわけではないことは、もちろんだが、そこには、自らの持つ力を自覚しにくい陥穽がつきまとう。しかも、大学でのセクシュアル・ハラスメント被害救済の「おそまつさ」を見れば、大学が持たねばならない、学問研究の自由をまもる原則が、恣意的な指導や評価を許し、被害者を孤立無援に追いやる構造になっていることがわかる。

学問研究の自由を守ること、尊敬されるべき教員であること、これらはセクシュアル・ハラスメントの遠因でもなんでもない。しかし、大学でセクシュアル・ハラスメントを生み、解決を難しくしているのがこれらの原則と根深くからみあっていることをわれわれは無視するわけにはいかない。自らの拠って立つものにメスを入れる勇気が、今大学人に求められている。

スポーツの世界のセクシュアル・ハラスメント問題には、そのような「自らの拠って立つ」原理がさらに根深く横たわっているように思われる。学校内外での体育やスポーツ指導の現場でのセクシュアル・ハラスメントはきわめて多い。技術指導で身体接触が伴いがちであることなどがその理由として挙げられることが多いが、問題の根は、そこにはない。大学のセクシュアル・ハラスメントの背景には権力構造の厳しさがあると述べたが、スポーツの世界には、それはむしろ日常の風景なのではないか。先輩と後輩、選手とコーチ、チームあつての個人。ある場合には厳しいシゴキといった形をとって、ある場合には、生活をなげうって指導に打ち込むコーチ、そんなコーチのために頑張る選手、という美しい師弟愛の形をとって。オリンピック級のスポーツ選手ならずとも、監督コーチと選手に、深い感情移入が生じるのは、スポーツでは珍しいことではなく、むしろ奨励されており、とくに女子選手と

コーチの間では、自然、あるいは不可欠のこととさえ思われているのではないか。そのことがそのままセクシュアル・ハラスメントを生むのではないが、被害女性の「信頼」が逆手に取られたり、断れば競技を続けられないという怖れ、そして声を上げたとしても学校のため、チームのために口をふさがれてしまう現実をみるにつけ、スポーツそのものが内包している性格とセクシュアル・ハラスメントは無縁ではあり得ず、スポーツの世界に権力関係があたかも空気のようにある限り、被害者は救われないという感を深くする。

学問研究というもの、スポーツというもの、その本質的性質がセクシュアル・ハラスメントを生む要因とつながっていることと、大学というアカデミックな世界、スポーツの世界が、これまでジェンダー・ブラインドであったこととの関係は深い。これらの世界に生きつつ、ジェンダーを研究する私たちにとって、セクシュアル・ハラスメントの問題は、自らの研究の実践的価値を問う、厳しい実技試験である。

パネリストのプロフィール

牟田和恵（むたかずえ）

甲南女子大学人間科学部 教授

< 専門 > 社会学・女性学

< 最近の研究テーマ / 活動 >

歴史社会学、ジェンダー論を専門領域とする。ジェンダーと近代化・国家形成の問題について研究。

セクシュアル・ハラスメント問題では、日本で初めてのセクハラ裁判であった福岡セクシュアル・ハラスメント裁判の支援組織代表を務めたほか、現在、全国の大学関係者有志で作る「キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク」に関わる。

< 主な編著訳書 >

1996年 『戦略としての家族---近代日本の国民国家形成と女性』新曜社

1998年 『ジェンダーで学ぶ社会学』（共編著）世界思想社

1999年 『知っていますか？セクシュアル・ハラスメント一問一答』（共著）解放出版社

2000年 『セクシュアル・ハラスメントのない世界へ』（共著）有斐閣

2000年 シーダスコッチボール 『現代社会革命論』（監訳）岩波書店

2001年 『実践するフェミニズム』岩波書店

ソルトレーク五輪を通して見るジェンダー研究の拡がり

阿部潔（関西学院大学社会学部）

1. メディア表象のなかの「ジェンダー」

- ・メディアとジェンダー：本質主義／構築主義の対立を超えて
- ・メディアの眼差し：見る／見られる のポリティクス
- ・メディアとジェンダーを批判的に問い直す：意識化／暴露／変革への戦略

2. ソルトレーク五輪をめぐるメディアとジェンダー

スポーツ／ジェンダー／メディア：「身体」をめぐる表象のポリティクス

現代社会において、スポーツとメディアは密接な関係に置かれている。スポーツは、常にすでに「メディア化 (mediated)」されているのだ。

こうした「スポーツとメディア」の関係がジェンダー化されていることは、今さら改めて述べるまでもない。例えば、メディアを通して「スポーツを観る」行為には、「見る＝男性／見られる＝女性」というジェンダー関係が潜んでいる。また、メディアが映し出すアスリートたちの身体は、スポーツ観戦する私たちの眼差しの対象になっている。こうした「眼差される身体」は、明らかにジェンダー化されている。と同時に、そうした「身体」には性的な魅力が潜んでいる。力強い／逞しい／しなやかな「スポーツする身体」は、美しい／魅力的な／エロティックな身体として受け止められているのだ。だとすれば、スポーツ／ジェンダー／メディアを論じていくうえで、人々が抱く性意識・感覚としての「セクシュアリティ」が重要なテーマとなる。

「アイドル」としてのアスリート：メディア表象における男の眼差し

ソルトレークシティ五輪をめぐるメディア報道では、人気選手をあたかも「アイドル」や「タレント」のように取り上げる言説が数多く見られた。こうしたスポーツ選手のタレント／アイドル化には、明らかなジェンダー差が見られる。例えば、モーグルの上村愛子、スピードスケートの三宮恵利子・岡崎朋美、フィギュアスケートの村主章枝など女性アスリートたちが、様々なメディアで取り沙汰されていた。全体の傾向として見た場合、男性選手よりも女性選手の方がスポーツ以外の側面においてメディアで取り上げられていた。こうした違いは、単に量的な問題ではなく質的な問題でもある。男性選手が実績や実力というスポーツ競技そのものに関連して取り上げられる傾向が強いのに対して、女性選手は競技における実績・実力に加えて、美しさ／可愛らしさという基準に照らして注目されていたのだ。

アスリートのあいだの友情：ホモソーシャルな「男同士の絆」

メディアが男性選手について語る時、しばしば選手間の「友情」や「絆」が重要な位置／意義を占める（「日の丸飛行隊」や清水宏保選手と武田豊樹選手のライバル同士の友情）。このように男性選手について殊更に友情や絆が語られる傾向は、イヴ・セジウィックが『男同士の絆』において「ホモソーシャルな欲望」と呼ぶものの典型である。セジウィックによれば、男性が抱くホモソーシャルな欲望／関係は、それがホモセクシャルな欲望／関係

とは明確に異なることを証明するべく、「女性」を性的な交換や獲得の対象と看做すヘテロセクシャルな欲望／関係とセットになって、近代のセクシュアリティを形成してきた。つまり、男同士の絆は、家夫長主義的なジェンダー関係に基づく「異性愛至上主義」とセットになっており、さらに同性愛に対する恐怖や嫌悪（ホモフォビア）を色濃く内包しているのだ。

こうした「ホモソーシャル」の視点に立つと、メディア表象におけるジェンダー差（アイドルのような女性選手／友情を重んじる男性選手）が、近代社会における「規範的なセクシュアリティ＝異性愛主義」と関連していることが明らかになる。

3. ソルトレーク五輪開会式におけるナショナリティとジェンダー

「アメリカ」の自己賛美：9・11テロへの対抗

ソルトレークシティ・オリンピックでは、開会式において演じられる「理念」が重要な意義を持っていた。なぜなら「9・11テロ」以後はじめてのオリンピックでは、テロに屈しない「アメリカの理念」が謳われねばならなかったからである。結果としてソルトレークシティ・オリンピック開会式では、「無差別テロ」という「絶対的な悪」に屈することなく自由と平等を旗印にさらなる前進を続けようとする「アメリカ」の姿が、望ましくかつ素晴らしいこと＝「正義」として多くの人々に受け止められていた。

マッチョな「アメリカ」：ホモソーシャルな絆の称賛

開会式では、「ナショナルなもの」がより力強く／男性的なもの＝「マッチョさ」として描き出されていた（例えば、西部開拓者としての「逞しい男」）。と同時に、仲間との連帯や助け合いが価値として掲げていた。それを典型的に表わしていたのが、最終聖火ランナーとしてスタジアムの聖火台に灯をともした、かつて「ミラクル・オン・アイス」を成し遂げたアイスホッケーチーム選手たちの姿である。

過去の栄光に思いを馳せることによって未来に向けた国民的連帯を唱えるセレモニーでは、「男たち」が主人公に据えられた。「男たちの絆」が、20年の時を超えて「アメリカの理念」への自己エールの担い手となったのだ。そこには、力強くマッチョな「ナショナルなもの＝USA!!」の表象が、ホモソーシャルな「男たちの絆」によって下支えされている様が窺える。

ヘテロな男／女のヘゲモニー：ナショナリズムとセクシュアリティの一元化

ソルトレークシティ・オリンピック開会式は、きわめてナショナリスティックであったと同時に、明らかにヘテロセクシャルであった。力強く逞しい男たちの「絆」は、その前提条件として性的対象である「美しい女」を想定している。そうした暗黙の「異性愛至上主義」を裏付けるかのように、開会式セレモニーのなかに「力強く逞しい女性」の姿は見当たらなかった。ホモソーシャル／セクシャルな「女たちの絆」は、それが今日に至るまで「スポーツとジェンダー」の研究と実践に大きな位置を占めてきたにも拘わらず、周到かつ徹底的に排除されてしまっていた。

このように、オリンピック開会式で主題とされたテロに屈することのない「アメリカ」の自己称賛は、ホモソーシャルな絆に基づく「ナショナルなもの」の担い手として「ヘテロセクシャルな男たち」（暗示的には「ヘテロセ

クシャルな女たち」を設定することで、結果的に「ヘテロセクシャルでない女や男」を徹底的に排除するものであった。なぜなら、そうした排除をすることこそが、ナショナルな野望とセクシャルな欲望とを結び付けつつ「マッチョなナショナリズム」を再生産するものであることが確認される。ここで見落としてならないことは、男たちのホモソーシャルな欲望／関係に基づくヘテロセクシュアリティの構築が、女性嫌悪（ミソジニー）と同性愛恐怖（ホモフォビア）という排他性を伴うものであるという点を表象するうえで必要不可欠だからである。そこに垣間みえるものは、セクシュアリティの一元化＝ヘテロ化を通じて成し遂げられる、排他的で暴力的な「ナショナルなもの」の構築にほかならない。

パネリストのプロフィール

阿部潔（あべきよし）

関西学院大学社会学部 助教授

<専門> 社会学 メディア／コミュニケーション論

<最近の研究テーマ／活動>

近年のスポーツの進歩は目覚ましい。その背景に、最先端の生理学に支えられた高度なスポーツテクノロジーがあることは、今や誰の目にも明らかであろう。メディアを介して伝えられる／映し出されるトップアスリートたちの「身体」は、マシンのような様相をますます強めている。そうしたなかで、スポーツ競技は「建前」である人格的な陶冶やフェアプレー精神にもとづく友好といったものからはかけ離れた、まるで高精度な機械のパフォーマンスレベルの競い合いの感を呈している。つまり、今やスポーツは「ヒューマン」の領域から「マシン」の領域へと移行しつつあるのだ。だからこそ、テレビをはじめとする各種メディアは、殊更に「人間的な」感動を呼び起こすような物語として、スポーツ選手たちを取り上げているのではないだろうか。つまり、現実のスポーツ自体が「マシン化」していくことへの「反動」として、なんとかして「人間的なもの」としてスポーツを表象することに、メディアも私たちも取り付かれているように思えて仕方がない。

しかしながら、「現代社会におけるスポーツ」の位置／意義を冷静に考えていくためには、安易な感動を語るのではなく、飽くまで冷徹に「スポーツする身体」を見極めていくメディアの語りが求められているのではないだろうか。最先端のスポーツの世界において生じている「身体の変容」は、けっして私たちの日常生活と無縁ではない。むしろそれは、ある種グロテスクな私たちで、私たちを取り巻く「変化」を象徴的に表わしているに過ぎないであろう。だとすれば、スポーツに垣間みられる「機械のような身体」は、ほかならぬ私たち自身にとっての「これからの身体」でもあるのだ。

このような現代社会における「身体の変容」をメディアがどのように捉えている／捉えていないかについて、具体的に検討していくことが最近のテーマである。

<主な著書>

『彷徨えるナショナリズム』世界思想社、2001年

『日常のなかのコミュニケーション』北樹出版、2000年

『公共圏とコミュニケーション』ミネルヴァ書房、1998年

Part 2 ラウンドテーブル

学校体育とジェンダー：ジェンダー・フリー実現に向けて

司会と進行 佐野信子 北田和美 松田恵示

平成元年の学習指導要領改訂により、日本の学校体育において明文化された形での男女区別は既になくなっていく。現状をみると、中学校・高等学校における男女共習（男女混合）授業の実践もさほど珍しいものではなくなりつつあるが、その一方で男女別カリキュラムを依然として存続している学校も少なくないといった、いわば過渡的な状況にある。

そのような中、ジェンダー・フリーの実現に向けて導入されたはずの男女共習授業場面において、必ずしも男女が公平に扱われてはいないという指摘も聞かれる。また、男女を一緒にして授業することによって、新たなジェンダーの問題が生じたという報告もある。一体、ジェンダー・フリーな学校体育はどのような形で実現され得るのだろうか。

本ラウンド・テーブルでは、木村涼子氏からご紹介いただくジェンダーと教育研究のさまざまな方法論を用いながら、スポーツとジェンダー研究において「何を」明らかにしていくことが必要であるのかを検討したい。今回は時間の制約もあることから、日本におけるスポーツとジェンダー研究の推進にあたって最重要テーマの一つであろう「学校体育とジェンダー」に焦点化する。新学習指導要領でも生涯スポーツの観点が再確認されているように、学校体育が生涯にわたる人とスポーツとの関わりにおいて果たす役割は決して小さくないと考えられる。教科としての体育授業、運動会・体育祭、部活動といった幅広い内容をもつ学校体育の現状をジェンダーの視点から捉える中から、男女共習授業がゆっくりとではあるが普及しつつある段階での今日的な問題点を導き出し、その解決に向けた研究の方向性を模索したい。

スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメント問題への対応

司会と進行 阿江美恵子 熊安貴美江

パネルディスカッションの牟田和恵（甲南女子大学）氏の「セクシュアル・ハラスメント問題が求める実践と研究の協同」を受けて、スポーツ場面でしばしば起こっているであろうセクシュアル・ハラスメントの実態について意見交換するとともに、加害者となりうる指導者と被害者となりやすい選手と、双方の意識改革を徹底するために何が求められているのかについて、議論を深めたい。

司会を務める熊安は社会学的立場からセクハラが生じる土壌としてのスポーツの権力構造に関心を持ち、同じく阿江は男性指導者の暴力的支配が女子生徒にどのような心理的影響を与えるかについて関心を持ってきた。これらの視点を踏まえ以下の内容を考えている。

1. スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントの実態

指導と嫌がらせの違い、男性指導者の問題

2. セクシュアル・ハラスメントを引き起こす要因

スポーツにおけるジェンダー・ブラインド

3. 二次被害を防ぐために

被害者が非難されないためのガイドライン作り

4. ジェンダーの視点を取り入れた教育の必要性

どのような啓発活動が有効か

セクシュアル・ハラスメントという問題自体への社会的認識が不十分という背景があるので、実態調査等へ研究の困難さも視野に入れた議論の展開を期待している。

司会と進行 平川澄子 大束貢 飯田貴子

現在のスポーツはメディアと密接不可分な関係にある。オリンピックも、サッカーワールドカップも、メディア環境なくして今日の隆盛はあり得なかったであろう。しかし、私達が日常的に接するメディアを介して伝えられるスポーツは、スポーツの現実そのものではなく、送り手の意図によって巧みに切り取られ、組み立てられたスポーツのストーリーである。特にテレビは視覚を通して情動に訴えることに優れたメディアであるので、スポーツのもたらす感動がそれ以外の目的のために利用されやすいことが度々指摘されてきた。また一方で、メディアに描かれるジェンダー・イメージが、現実社会におけるジェンダー関係を生産/再生産していることは周知の通りである。

パネリストである阿部潔氏は、これまでその著作の中でメディア・イベント化したスポーツが孕む「隠れたナショナリズム」について鋭い追求を試みてきた。そして、今回は、今年2月に行われたばかりのソルトレーク五輪を題材にして、ジェンダーと表裏一体のセクシュアリティの政治性についての追求を試み、スポーツの場面でよく見受けられる男性同士の絆(ホモソーシャルな関係)は近代社会における「規範的なセクシュアリティ=異性愛主義」を再生産するものであると指摘する。

本ラウンド・テーブルでは、阿部氏の分析視点を切り口に、

1. メディア表象において「ジェンダー化された身体」のもつ意味について
2. メディア・スポーツにおけるナショナリティとセクシュアリティの関係について
3. スポーツにおけるメディアとジェンダーのあるべき方向について

などの観点から、さらに議論を深めたいと考えている。

研究会への入会のご案内

日本スポーツとジェンダー研究会（JSSGS）では、随時、会員の入会を受け付けております。入会のお申込みは、事務局まで直接お問合せいただくか、本研究会ホームページよりオンライン登録で行っていただくことができます。

< 入会お申込み・お問合せ先 >

〒590-0035 大阪府堺市大仙町2-1 大阪女子大学
人間関係学科 熊安貴美江研究室内
日本スポーツとジェンダー研究会事務局
Tel. 072-222-4811(内線)4354 Fax. 072-222-4791
E-mail : info@jssgs.org

< JSSGSJSSGS 会員オンライン登録の方法とご注意 >

日本スポーツとジェンダー研究会では、会員登録のオンラインによる受付を行っております。研究会のホームページ（<http://www.jssgs.org>）にアクセスし、会員登録ページから入力フォームにご記入いただき、記入事項に間違いがないかどうかご確認の上、「送信」ボタンをクリックしてください。事務局から申込み受付確認のメールを返信いたします。

なお、オンライン登録をご利用いただく場合は、下記の事項にご注意ください。

フォーム送信後、1週間以上経過しても、事務局から返信メールが到着しない場合は、送信トラブル等が発生した可能性がありますので、お手数ですが、info@jssgs.org まで、ご連絡ください。オンラインでの登録は、仮登録となります。JSSGS 規約に定められた会費を納入していただくことにより、正式に登録が完了します。なお、会費納入方法等につきましては、事務局からの申込み受付確認メールでお知らせします。

現在、総会に提案される予定の会員種別およびその年会費は下記のようにしております。

- | | | | |
|----------|----------------|----------|-------------|
| (1) 正会員 | 年額 5,000 円 | (2) 学生会員 | 年額 2,500 円 |
| (3) 団体会員 | 10 名につき年額 1 万円 | (4) 賛助会員 | 年額 10,000 円 |

ホームページのご案内

日本スポーツとジェンダー研究会では、スポーツとジェンダーに関わる情報交換の場として、ホームページを公開しています。現在、研究集会の案内や報告をはじめ、図書情報、テーマを設定しての公開ディスカッション、関連サイトへのリンク集などがご覧いただけます。今後も内容を充実させていく予定です。みなさまのアクセスをお待ちしています。

JSSGS ホームページ URL <http://www.jssgs.org>